

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和4年6月)

野菜振興部・調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万5348トン、前年同月比98.9%、価格は1キログラム当たり267円、同102.1%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5606トン、前年同月比97.2%、価格は1キログラム当たり239円、同104.4%となった。
- 東京都中央卸売市場における指定野菜14品目の価格のうち、平年を下回ったものは、ばれいしょ(平年比77.8%)、きゅうり(同81.6%)、なす(同88.8%)、平年を上回ったものは、たまねぎ(平年比235.7%)、トマト(同119.5%)、レタス類(同118.8%)、さといも(同117.0%)、にんじん(同116.6%)、ねぎ(同111.7%)、だいこん(同104.5%)、ピーマン(同102.9%)、キャベツ類(同102.4%)、はくさい(同101.9%)、ほうれんそう(同100.4%)となった。
- 他の食料品が値上がりする中、予算が決められた給食などは青果物の購入量を減らすなど、業務筋が高値で引き合いを強めるといった展開はないと予想している。また、北海道産は初期の低温でやや遅れているが、7月から8月にかけても通常通り入荷し、コロナ禍前に発生した価格急騰の場面はなく、平年並みで高くない水準が保たれると予想している。

(1) 気象概況

上旬は、北日本では、低気圧や気圧の谷、オホーツク海高気圧から流れ込む冷たく湿った空気の影響を受けやすく、旬平均気温はかなり低かった。東・西日本では、旬のはじめは高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、関東地方を中心に大気の状態が不安定となった日があり、各地でひょうの被害が相次いだ。関東甲信地方は、6日頃に梅雨入りしたとみられる。旬平均気温は、東日本で低かった。西日本と沖縄・奄美では平年並だった。旬降水量は、北・東・西日本日本海側、北・東日本太平洋側と沖縄・奄美が多かった。西日本太平洋側では平年並だった。旬間日照時間は、西日本太平洋側でかなり多く、西日本日本海側が多かった。一方、沖縄・奄美でかなり少なく、北日本太平洋側で少なかった。北・東日本日本海側と東日本太平洋側では、平年並だった。

中旬は、北日本では、天気が数日の周期で変化した。東・西日本と沖縄・奄美では、東

シナ海から本州南岸付近に停滞した梅雨前線や、前線上を東進した低気圧の影響を受けやすく、曇りや雨の日が多かったが、東・西日本ではまとまった雨とならなかった所が多く、日本海側を中心に高気圧に覆われて晴れた日もあった。九州南部、九州北部地方では11日頃、四国地方では13日頃、中国地方、近畿地方、東海地方、北陸地方では14日頃、東北南部、東北北部では15日頃に梅雨入りしたとみられる。一方、沖縄地方では、旬の終わりに太平洋高気圧に覆われて晴れた所が多くなり、20日頃に梅雨明けしたとみられる。旬平均気温は、全国で平年並だった。旬降水量は、東・西日本日本海側と東・西日本太平洋側で少なかった。一方、沖縄・奄美が多かった。北日本日本海側と北日本太平洋側では、平年並だった。旬間日照時間は、東・西日本太平洋側で少なかった。北・東・西日本日本海側、北日本太平洋側、沖縄・奄美では平年並だった。

下旬は、九州南部、東海、関東甲信は27日頃、九州北部、四国、中国、近畿、北陸は28日頃、東北南部は29日頃に梅雨明けしたとみられ、

1951年以降で最も早い記録となった地方が多かった（速報値）。高気圧に覆われやすかったため、旬間日照時間は、東・西日本日本海側と東・西日本太平洋側でかなり多く、沖縄・奄美で多かった。北日本日本海側で少なく、北日本太平洋側では平年並だった。東日本太平洋側の旬間日照時間は平年比207%で、1946年の統計開始以降、6月下旬として1位の多照となった。旬降水量は、西日本太平洋側でかなり少なく、東・西日本日本海側と東日本太平洋側で少なかった。一方、北日本は、

低気圧や前線の影響で大雨となった所があり、北日本日本海側と北日本太平洋側でかなり多く、北日本日本海側の旬降水量は平年比317%で、1946年の統計開始以降、6月下旬として1位の多雨となった。暖かい空気が流れ込みやすかったため、旬平均気温は、北・東・西日本でかなり高く、平年差は東日本で+4.0℃、西日本で+3.2℃となり、それぞれ1946年の統計開始以降、6月下旬として1位の高温となった。旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図1）。

図1 気象概況



(2) 東京都中央卸売市場

5月の東京都中央卸売市場における野菜全

体の入荷状況は、入荷量は11万5348トン、前年同月比98.9%、価格は1キログラム当たり267円、同102.1%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（6月速報）

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	115,348	98.9	91.9	267	102.1	106.3	272	277	251
だいこん	6,802	113.3	95.5	105	96.9	104.5	113	105	96
にんじん	5,547	87.1	85.1	154	125.0	116.6	148	164	151
はくさい	6,087	98.4	91.6	70	98.2	101.9	68	76	68
キャベツ類	16,718	107.9	104.1	84	97.1	102.4	93	88	70
ほうれんそう	1,314	93.5	100.3	469	109.7	100.4	491	476	440
ねぎ	3,471	96.2	92.4	433	117.5	111.7	426	467	404
レタス類	7,505	93.6	89.6	153	103.5	118.8	167	165	132
きゅうり	6,907	91.7	93.7	220	82.6	81.6	231	234	196
なす	3,230	103.4	93.7	347	87.4	88.8	357	361	324
トマト	7,249	100.0	87.8	334	111.2	119.5	328	374	308
ピーマン	2,344	101.5	96.2	426	84.4	102.9	445	453	380
さといも	127	80.1	68.7	506	105.5	117.0	450	577	487
ばれいしょ	7,425	95.2	91.3	121	68.3	77.8	128	117	118
たまねぎ	8,478	92.4	80.0	210	197.7	235.7	215	208	206

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、不足感から堅調な動きとなり、やや安めに推移した前年を2割以上上回り、平年を1割以上上回った(図2)。

葉茎菜類は、レタス類の価格が、やや高めに推移した前年をやや上回り、平年を2割近く上回った(図3)。

果菜類は、きゅうりの価格が、平年並みであ

った前年を2割近く下回った(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が、絶対数不足から引き続き高値基調が続き、高めに推移した前年の2倍近い価格となり、平年の2.3倍以上の価格となった(図5)。

なお、品目別の詳細については表2のとおり。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

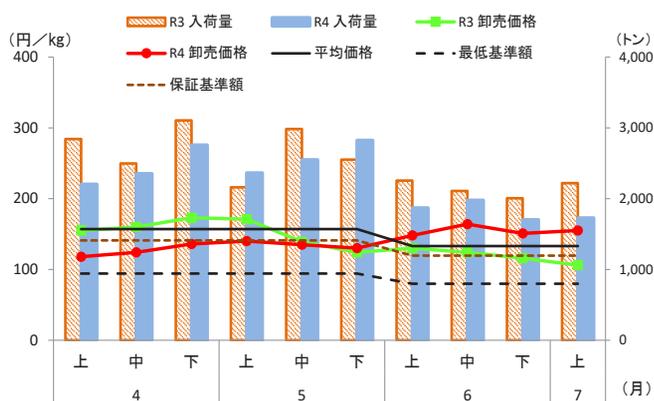


図3 レタス類の入荷量と卸売価格の推移

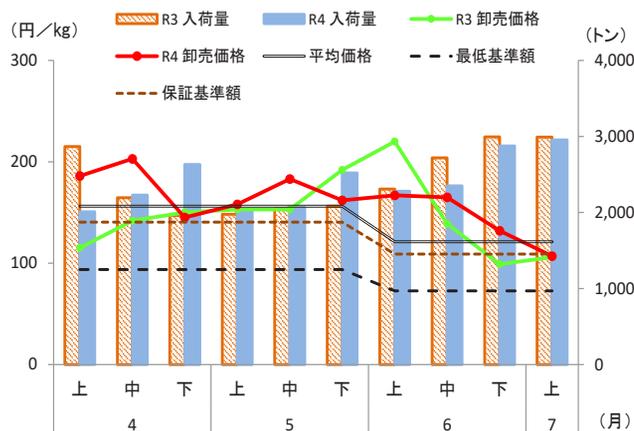


図4 きゅうりの入荷量と卸売価格の推移

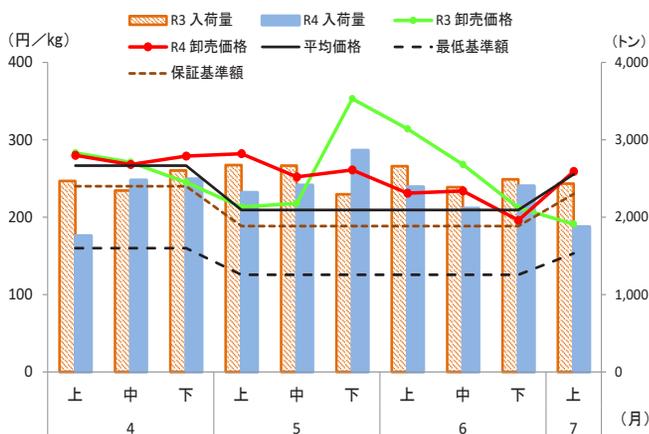
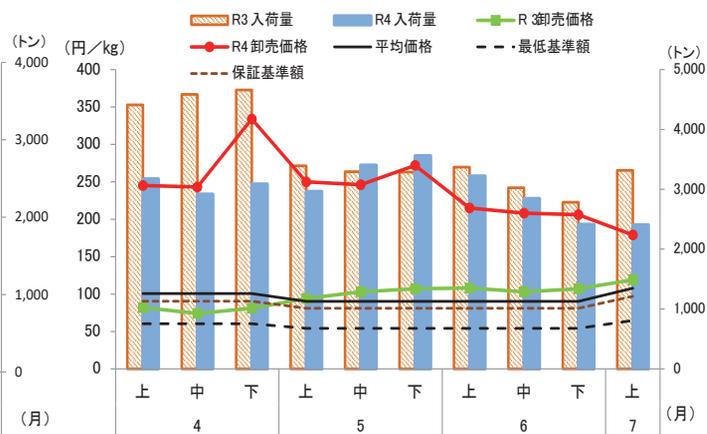


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	6月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>青森産中心に千葉産、北海道産などの入荷があった。青森産の作付けは前年並みで、5月の乾燥の影響はあったものの6月の適度な降雨で生育は順調。病虫害の発生も少ない。千葉産の作付面積は前年並みで、低温・干ばつで生育は遅延傾向であったが気温の上昇に伴い回復し、終盤で漸減した。北海道産の作付けは前年並みで、生育はおおむね順調。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は入荷減から高めに推移した前年をやや下回り、平年をやや上回った。</p>
	にんじん 	<p>千葉産中心の入荷で、徳島産は切り上がりとなった。千葉産の作付けは前年並みで、2～3月の低温・干ばつの影響でやや遅れも気温上昇で回復した。後続の北海道産、青森産は低温・乾燥による生育不良がみられるがおおむね順調。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は不足感から堅調な動きとなり、やや安めに推移した前年を2割以上上回り、平年を1割以上上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>長野産中心の入荷となった。茨城産は上旬ではほぼ切り上がった。長野産の作付面積は前年並みで、4月の気温は高めに推移し、適度な降雨もあったことから生育は順調。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格はやや高めに推移した前年をわずかに下回り、平年をわずかに上回った。</p>
	キャベツ類 	<p>千葉産を中心に茨城産、群馬産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、2月の低温・乾燥で一部遅れが見られたが、その後の気温の上昇に伴い前年並みまで回復した。茨城産も作付面積は前年並みで、やや遅れが散見されるも生育はおおむね順調。群馬産も作付面積は前年並みで、晩霜で一部の圃場での生育停滞が見られたが、5月の気温上昇で回復した。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は下旬に向け落ち着いたものの、前年をわずかに下回り、平年をわずかに上回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>群馬産、茨城産を中心とした関東産の入荷だった。茨城産の作付けはこまつなの作付減に伴い増加し、その他の作付面積は前年並み。生育は平坦地ではおおむね順調だが、5月上旬の天候不順から、群馬産、栃木産の高冷地に遅れが散見された。下旬の急激な気温の上昇で平坦地の品質に著しく低下が見られた。総入荷量は前進出荷で多かった前年をかなりの程度下回り、前年並みとなった。</p> <p>下旬に向け平坦地の品質低下から価格を下げたものの、安めに推移した前年を1割近く上回り、平年をわずかに上回った。</p>
	ねぎ 	<p>茨城産の夏ねぎを中心に千葉産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで生育はおおむね順調。2L比率が下がりL、Mサイズ中心の出荷。千葉産の作付けも前年並み。2月までの低温・干ばつの影響でやや生育が停滞していたが、3月以降の気温の上昇に伴い回復した。各産地とも急激な天候変化により軟腐病などの病害が発生している。総入荷量はやや少なかった前年を下回り、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格は入荷減となったことから安めに推移した前年を2割近く上回り、平年を1割以上上回った。</p>
	レタス類 	<p>長野産を中心に群馬産の入荷があった。長野産の作付面積は前年並みで、4月の気温上昇と適度な降雨で生育は順調。群馬産の作付面積は前年並みで、低温による生育停滞から適度な降雨により回復し、若干前進傾向。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格はやや高めに推移した前年をやや上回り、平年を2割近く上回った。</p>
果菜類	きゅうり 	<p>埼玉産、群馬産を中心に福島産の入荷があった。各産地作付面積は前年並み。関東産はピークを過ぎて漸減の中、埼玉産は夜温の低下など天候の影響はあるもののおおむね順調。群馬産の生育はおおむね順調だが、一部強日射による障害が散見された。福島産は虫害が散見されるもののおおむね順調。総入荷量はやや多かった前年を1割近く下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は前年並みであった前年を2割近く下回った。</p>
	なす 	<p>高知産を中心に群馬産の入荷があった。作付面積は前年並みで、一部で成り疲れからすかび病や黒枯病などの病害の発生が見られたが、おおむね順調。中下旬に向け漸減。群馬産はやや遅れたが気温の上昇により回復し順調。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は関東産の増量に伴い、下落傾向となり、前年並みであった前年を1割以上下回った。</p>
	トマト 	<p>熊本産、栃木産を中心に愛知産、千葉産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年をやや下回り、生育はおおむね順調であるが一部地域で病害が散見された。栃木産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も一部着果負担による草勢低下が散見され、うどん粉病や灰かび病の発生が散見されている。愛知産の作付けは前年並みで生育は順調。千葉産の作付けは前年並みで曇雨天の影響でやや小玉傾向。生育もやや遅れていたが回復傾向。総入荷量は少なかった前年並みとなり、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は熊本産の切り上がり早く中旬に価格を上げ、高めに推移した前年を1割以上上回り、平年を2割近く上回った。</p>

	 ピーマン	<p>茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育は若干遅れ気味もおおむね順調。総入荷量はやや少なかった前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は岩手産が開始したが本格化には程遠く、大幅に高めに推移した前年をかなり大きく下回り、平年をわずかに上回った。</p>
土物類	 さといも	<p>鹿児島産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、曇雨天の影響で生育遅延し、掘り取りも進まない。中国産の輸入は前年を1割近く下回った。総入荷量は大幅に少なかった前年を2割ほど下回り、平年を3割以上下回った。</p> <p>価格は高めに推移した前年をやや上回り、平年を2割近く上回った。</p>
	 ばれいしょ	<p>長崎産を中心に静岡産の入荷があった。長崎産の作付面積は前年並みで、低温・乾燥の影響で生育は遅延していたがその後回復した。小玉傾向から肥大も回復したが一部病害が、散見される。静岡産の作付けは前年並みで、低温・干ばつの影響を受けていたが4月以降の適度な降雨と気温の上昇で順調。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格は長期にわたる高値での動きの鈍化に加え、気温の上昇での需要減退から、高めに推移した前年を3割以上下回り、平年を2割以上下回った。</p>
	 たまねぎ	<p>佐賀産、兵庫産を中心の入荷となった。佐賀産の作付けは前年をやや下回り、生育はやや遅れていたが気温の上昇と降雨により回復しておおむね良好も、べと病の発生が散見されている。兵庫産の作付は前年並みで、目立った病虫害はなくおおむね順調。適度な降雨と気温の上昇で肥大不足もほぼ回復している。中国産の輸入は前年を8割近く上回っている。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を2割下回った。</p> <p>価格は絶対数不足から引き続き高値基調が続き、高めに推移した前年の2倍近い価格となり、平年の2.3倍以上の価格となった。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

5月の大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5606トン、前年同月比

97.2%、価格は1キログラム当たり239円、同104.4%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(6月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	35,606	97.2	93.0	239	104.4	107.3	250	240	227
だいこん	2,092	89.2	85.2	112	100.9	110.3	120	115	104
にんじん	2,716	101.1	102.2	122	123.2	113.2	111	127	128
はくさい	3,149	103.7	103.2	78	95.1	100.0	85	79	72
キャベツ類	4,138	100.0	94.0	88	93.6	98.4	100	87	77
ほうれんそう	437	89.2	89.0	582	99.8	98.7	585	580	580
ねぎ	489	94.9	86.2	507	109.0	112.8	528	533	463
レタス類	1,909	80.4	76.4	162	110.2	129.4	177	177	139
きゅうり	1,689	98.5	104.0	207	79.3	84.1	208	217	198
なす	1,232	118.4	110.4	316	90.8	93.3	350	317	286
トマト	2,091	116.1	102.7	333	108.1	115.9	329	340	332
ピーマン	589	120.0	96.7	328	73.4	94.4	341	324	318
さといも	22	66.5	57.8	610	130.1	127.9	720	599	533
ばれいしょ	2,816	97.5	94.4	103	72.0	70.2	104	104	99
たまねぎ	3,529	90.4	80.9	208	196.2	225.6	214	208	203

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5力年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	6月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>北海道産と青森産を中心とする入荷に月の前半は和歌山産の残量、中旬以降は岐阜産の入荷もあった。各産地とも太物の3L、2L級が中心となり、L、M級が少なく、全体としては入荷量が少なく全旬とも伸び悩んだ。北日本は例年に比べて雨や曇天の日が多く気温も低かったため、北海道産と青森産は収量が伸びず、旬を追うごとに入荷減量となり、月間では前年を大幅に下回った。全体でも前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>入荷量は伸び悩んだが太物傾向が強かったため、価格も伸び悩んだ。月間では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	にんじん 	<p>月の前半は長崎産、中旬以降は和歌山産が中心となり、兵庫産の入荷もあった。和歌山産を除いて各産地とも小玉中心となり、全体的にも入荷量は伸び悩んだ。長崎産は下旬には終盤を迎え、兵庫産も旬を追うごとに入荷減量、下旬に北海道産の入荷が始まったが降雨と曇天続きで入荷量は少なかった。和歌山産は全旬とも比較的安定した入荷で、月間全体では前年、平年ともわずかに上回った。</p> <p>価格は後続産地に切り替わったことと全体的な品薄感から、中旬以降に上伸して高値推移となった。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>九州産、茨城産は上旬で終了し、長野産を中心とする入荷となった。長野産は潤沢な入荷を続け、旬を追うごとに入荷増量となった。月間全体でも前年、平年ともやや上回った。</p> <p>前段の産地終了後に量販店からも加工筋からも注文が集中したため、価格は一時的に高値となったが、後続産地の入荷増量と気温高に伴って旬を追うごとに下落した。月間では前年をやや下回り、平年並となった。</p>
	キャベツ類 	<p>月の前半は愛知産、中旬以降は茨城産が主体となり、大分産の入荷もあった。後続の夏秋産地の長野産は干ばつの影響から生育が遅れ、中旬からスタートしたが入荷量は伸び悩んだ。群馬産も下旬から入荷スタートした。愛知産は残量多く月の後半まで順調な入荷を続け、大分産も上中旬は入荷量が多く、月間全体では前年並の入荷量となったが、平年はかなりの程度下回った。</p> <p>中下旬に入荷した九州産地と茨城産の品質低下があり、価格は伸び悩んだ。全体でも旬を追うごとに下落を続け、月間では前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>岐阜産を中心とする入荷であった。比較的順調な入荷が続いたが、下旬には気温高により入荷減量となり、月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年もかなり大きく下回った。</p> <p>絶対量不足の中でも価格は伸び悩み、前年並で、平年をわずかに下回った。</p>
	ねぎ（白ねぎ） 	<p>茨城産と鳥取産が中心となる入荷であった。各産地とも干ばつの影響で太りが悪く細分傾向となり、入荷量は伸び悩んだ。茨城産は旬を追うごとに入荷減量となり月間では前年を大幅に下回った。鳥取産は旬を追うごとに微増傾向で月間では前年を若干上回った。全体では前年をかなり下回った。</p> <p>価格は全体的な品薄感から高値推移となり、月間では前年を上回った。</p>
	ねぎ（青ねぎ） 	<p>徳島産を中心とする入荷であったが、病害虫の発生が多く入荷量は旬を追うごとに減少傾向となった。特に下旬の入荷量が少なく前年の半分以下となった。細ねぎは高知産と静岡産が中心となる入荷であった。生育良好で入荷量は多く、特に静岡産は前年の2倍以上の入荷となった。青ねぎ類の月間全体では前年をやや下回る入荷量であった。</p> <p>月の前半は単価安であったが、品薄感から後半は回復傾向となった。しかし末端の動きは悪く単価は伸び悩み、弱保ち合い傾向で推移した。</p>
	レタス類 	<p>長野産の入荷であった。干ばつと急な気温高の影響で生育が悪く入荷は不安定であった。旬を追うごとに入荷増量となったが量自体は少なく、全旬とも前年を下回った。サニーレタスとリーフレタスは長野産中心の入荷で、レタス同様に干ばつと気温高の影響で入荷不安定、少ない入荷量となった。レタス類全体でも、月間全体では前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>価格は前年が安かったこともあるが、高値での推移となった。サニーレタスとリーフレタスも同様の傾向で、月間全体でも前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心として高知産や徳島産の入荷があり、後続の福島産や下旬には長野産の入荷も始まった。量販店での特売需要が少なく、引合いが弱かったことから積極的な荷引きができずに入荷減量となり、宮崎産は下旬には終盤となり、全体でも下旬の入荷量は前年を大幅に下回った。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。</p> <p>特売需要がなかったことから引合いも弱く価格も伸び悩み、下旬に下落し、月間でも前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。</p>
	なす 	<p>千両茄子は大阪産、高知産、京都産が主体となり、長茄子は福岡産と熊本産が主体となる入荷で愛媛産の入荷も始まった。中下旬に後続産地の入荷量が増え、月間全体でも前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>末端売価が安く単価安での推移となり、入荷増量に伴って旬を追うごとに下落を続けた。月間では前年、平年ともかなりの程度下回った。</p>
	トマト 	<p>愛知産を中心として熊本産、奈良産、石川産、中旬以降は北海道産の入荷もスタートした。愛知産は終盤に向かい旬を追うごとに入荷減量傾向となり、後続産地は干ばつと初期生育期の低温の影響で上旬までは量が少なく、中旬以降に回復して増量傾向となった。月間全体では前年を大幅に上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>入荷量に大きな変化もなく、産地の切り替えもスムーズに移行したことから、安定した高値推移が続いた。月間では前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。秋冬産地の単価が安かったため切り上げが若干早まったが、後続産地は干ばつと初期生育期の低温の影響で出遅れたため、旬を追うごとに入荷減量となり、下旬は前年を大幅に下回った。月間全体では少なかった前年を大幅に上回り、平年をやや下回った。</p> <p>引合いは弱く末端売価が安かったため価格は伸び悩んだ。入荷減量でも旬を追うごとに下落傾向となり、月間では前年を大幅に下回り、平年をやや下回った。</p>
土物類	ざいも 	<p>輸入の中国産が主体となったが、コロナ禍の影響もあり、入荷量は前年を大きく下回った。国内産は、ほぼ鹿児島産の入荷であったが、早い梅雨入りと長雨の影響で収穫作業が進まず、前月に続いて入荷量は少なく前年を大きく下回った。月間全体でも前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>価格は絶対量不足から月の初めに高騰した。旬を追うごとに下落はしたものの、月間では前年、平年とも大幅に上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は長崎産を中心とする入荷であった。2L、Lを中心とする入荷で、月の初めは鹿児島産の残量もあり販売に苦戦した。メークインも長崎産を中心とする入荷であった。降雨も少なく掘り取り作業も進み潤沢な入荷が続いた。ばれいしょ月間全体では前年をわずかに下回り、平年もやや下回った。</p> <p>気温上昇と共に量販店の発注量が大幅に減少したことで販売に苦戦し、全旬を通じて単価は伸び悩んだ。月間全体では前年、平年とも大幅に下回った。</p>
	たまねぎ 	<p>兵庫産を中心とする入荷であった。月の初めは佐賀産や大阪産の残量入荷もあったがすぐに切り上がった。長く続いていた高値の影響が残り、産地高が続いていることから量販店での荷動きが悪く、発注も少ないため入荷量は伸び悩んだ。高値が続いたことから安価な輸入の中国産の入荷が増え、全旬を通して入荷量は多く、月間では前年を大きく上回った。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>旬を追うごとに徐々に安値傾向ではあるものの、月間では前年の2倍近い価格が続き販売は苦戦した。輸入の中国産も価格高が続き、月間では前年を大きく上回った。全体でも前年の2倍近く、平年の2倍以上となった。</p>

(執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした7月の見通し

4～5月の北海道は例年のない低温であった。回復が早い北海道であっても、今後の天候から目が離せない。関東以西は7月初めまで空梅雨となっており、露地野菜を中心に遅れて、

全般的に切り上がりが例年より後ろにずれた。そのためキャベツなどは価格が安かった。

6月の東京市場の入荷は、前年比微減、価格は若干高くなっている。しかし、小売の段階では、売上金額で昨年を割り込んでおり、他の食料品が値上がりして青果に回す余裕が無くなっ

ているとみられている。学校給食は予算が決められているため、青果物の購入量を減らしていることなどからも、業務筋が高値で引き合いを強めるといった展開はないと予想している。7月上旬後半に一旦猛暑が収まって、野菜の供給が急減するといった最悪の展開は回避された。北海道産は初期の低温でやや遅れているが、7月から8月にかけて通常通り入荷し、コロナ禍前に発生した価格急騰の場面はなく、平年並みで高くない水準が保たれると予想している。

根菜類



だいこんは、北海道産（道央のようてい）の収穫はほぼ計画通り6月末頃からのスタートとなった。低温の時期もあったが、現状は抽苔ちゅうたひの発生は見られない。7月11日の週に1回目のピークが来て、8月上旬に2回目のピークが来ると予想している。8月下旬には6月下旬の降雨の影響で一旦減ることも予想される。全体の出荷は平年並みかやや減と予想している。同産（道東の標茶しべちや）は一部地元への出荷が始まったが、東京市場へは平年よりやや遅い7月21日頃からと予想される。6月から7月にかけての長雨の影響を一部の圃場では受けているが、今後の出荷ではほとんど問題はないとみている。作付けが微増で、2L、Lサイズ中心に8月から9月がピークと予想される。

にんじんは、北海道産（道央のようてい）は現状までは高温過ぎず、適度の降雨で生育は順調である。6月初め頃に低温になったが、抽苔は見られない。選果の開始は8月2～4日で、出荷のピークは8月下旬から9月上旬と予想している。同産（道南の新函館）は、7月に入り出荷のピークで、8月にはかなり少なくなると予想される。発芽不良の場所もあり、本年産は不作傾向である。同産（道東の斜里）の掘り採りは7月23日から始まり、東京市場での販売は27日頃を予想している。出荷のピークは8月いっぱい、9月には徐々に減りながら推移し、10月にはかなり少なくなると予想される。前年は干ばつで大幅に減収したが、今年は前年を上回って平年並みの予想である。品種は「晩抽天翔」で、中心サイズはMを予想している。



葉茎菜類

キャベツは、群馬産は高温・干ばつが続いて雨が欲しいところであったが、7月3日によやく降り始めた。当初の平野の物は遅れたが、現状は前年並みに順調に出荷できている。今後8～9月にピークを迎えるが、前年並、平年並の出荷量を予想している。岩手産は、例年より遅れて出始めた。晩霜に見舞われ、その後の干ばつで揃いが悪い。7月中旬には回復して8月はさらに増えてピークとなろう。岩手県も気温は上がっているが、今のところ生育は順調である。作付けは前年の105%と増えており、農家の意欲は旺盛である。

はくさいは、長野産は7～8月は標高1200～1300メートル地帯からの出荷となる。現状は干ばつの影響で一部に葉の萎縮がみられるものの、基本的には生育順調である。作付けは前年並であるが、7月下旬から8月にはやや少なくなってくると予想される。

ほうれんそうは、岩手産の現状は高温の影響で生育はやや止まっており、少ないまま8月に入ることも予想される。前年は平年並であったが、作付けの減少からやや前年を下回ることも予想される。群馬産は6月いっぱい多く出荷できたが、暑さの影響で7月に入り減っている。7月に入って高温が収まったことで量的には回復してくるが、人手不足も影響して8月も前年を下回ると予想している。岐阜産の現状は暑さの影響でやや減っている。天候次第で多少回復することも予想されるが、本格的に回復するのは9月中下旬になってからとみている。8月は今のところ前年並を予想している。

ねぎは、青森産（十和田奥入瀬）が7月上旬後半から収穫が開始され、市場へは7月11日頃から出荷が始まると予想される。作付けは前年並みで、9月が最大のピークと予想している。同産（つがる西北）のハウスは始まっているが、露地は7月中旬からと予想される。7月初めの雨で圃場ほしやうに入れない状況で、この後の軟腐の発生が心配される。問題がなければ盆前後からピークとなり、稲刈り前の9月中旬まで続き、その後10月中下旬が再びピークとなると予想さ

れる。北海道産（新函館）は6月1日から始まったが、ピークは8月下旬から9月までで、切り上がりは11月の積雪前と予想される。作付けは前年の103%と増えている。降雨の影響はなく、むしろ定植時期の干ばつで遅れがある。

レタスは、長野産は7月に入り出荷のピークになってきた。7月15日頃に折り返し地点を迎えるが、現状は遅れている。干ばつが続いて肥大不足も見られ、さらに7月に入ってから異常気象から、8月は前年を下回る可能性がある。特別大きな減少はないが、通常どおり盆明けから数量は減ると予想される。群馬産は、日長の時期の高温によって、圃場で傷みが発生している。7月に入り気温が下がって中旬から回復してくると予想している。気温が特別高くなければ8月は通常のペースで出荷できると予想される。

果菜類



きゅうりは、福島産は今後ハウス・雨除け・露地と全ての作型が揃ってピークを迎えるが、8月に入りハウスは品種の切り替えで減ってくると予想される。5月から6月にかけての低温の影響で、現状やや果形が悪い。量的にはほぼ前年並の出荷を予想している。岩手産の露地物は6月初め頃の低温により、現状4～5日遅れている。前年はピークらしいピークがなく、盆の低温で早めに切り上がった。今年は遅れた分、7月下旬から8月上旬にかけてやや多くなると予想している。作付けは前年を上回っており、9月いっぱいの出荷を目指している。

なすは、栃木産の現状はハウスと露地の出荷となっている。7月20日頃に露地の生産者が揃い、8月いっぱいまで出荷のピークと予想している。猛暑であるが、今のところ大きな問題なく、生育順調である。前年は盆の時期の天候不順で少なかったが、通常であれば前年を上回ると予想される

トマトは、北海道産のピークは7月中旬に1回目、8月盆頃に2回目のピークと予想される。今年は作付けの減少に加え、曇天続きと雨の影響で出荷は減っている。6月までの実績は前年の63%であった。8月はL玉中心で、同95%

程度と予想している。青森産（田子）の生育は平年よりも7日程度の遅れとなっている。当面的出荷のピークは7月下旬、8月8日頃から盆前頃まで潤沢な出荷と予想している。昨年は盆から下旬に減少した。品種は「りんか」であり、段ごとに色づくことが評価されている。同産（つがる西北）の作付けは前年の90%と減っている。高温と多照で葉のしおれが見られるものの順調で、各段に実が付いている。7月後半から8月がピークと予想しているが、平年より多くなると予想している。現状は2Lサイズ中心であるが、8月にはM中心とLサイズの出荷が予想される。群馬産の夏秋ものは、6月の低温による遅れは回復してきた。現状は出始めの段階であるが、高温でやや軟弱気味である。今後持ち直して8月は平年並みの出荷を予想している。この高温で6段5段の花がやや減っている。

ミニトマトは、北海道産の作付けは前年の95%と、高齢化による離農が進んでいる。生育は日照不足により遅れている。6月下旬の降雨による影響はないが、湿害は発生しやすくなっている。ピークは7月末頃から盆前頃と予想している。

ピーマンは、岩手産の現状は露地の出始めであるが、定植時期の低温で停滞したため出遅れて少なめのスタートとなった。海の日頃に1回目のピークとなり、盆明け頃に2回目のピークと予想している。6月後半に入り高温で進んだが、実の付き方が悪い。ハウスは4月の定植で順調であったが、その後の低温と最近の高温で実腐れの発生など例年より悪い。作付けは増えているが、8月は例年をやや下回る出荷となろう。茨城産の8月は、春ピーマンを引き続き出荷する生産者、秋ピーマンを早めた生産者が両方入荷するが、端境期である。量的にはやや少なめであった前年並の見込みである。福島産は5月の多雨と曇天続きの影響で、ハウスとトンネルは7～10日の遅れ、露地は2週間の遅れとなっている。ハウスは7月20日から盆前までピークと予想される。トンネルは8月5日頃からピークと予想している。現状の出荷は例年の半分程度であるが、8月は同70～80%程度と少なめの出荷が予想される。



土物類

ばれいしょは、北海道産（今金）の「男爵」は8月上旬から始まり、平年並である。大雨で一部冠水や土壌の流亡などの被害に遭った。9～10月がピークであるが、出荷は前年の90%と前年を下回ると予想される。肥大は今のところL大サイズ中心と予想している。同産（芽室）は「メイクイン」産地からとなるが、8月末頃から選果が始まると予想している。当初の生育は進んでいたが、現状は若干の前進に抑えられている。「メイクイン」と「とうや」の作付けは増えている。9月から翌2月初めまで、ほぼ一定のペースで出荷されると予想される。同産（道央）の「きたあかり」は7月末頃から始まると予想している。生育期間中は曇りの日が多くまとまった雨もあった。また、全般に低温気味ではあるが、例年並みの生育である。8月は苗で定植した促成物、下旬に入って通常作の物が始まると予想される。

たまねぎは、北海道産は例年並みに8月上旬から出荷が始まると予想される。6月から7月にかけての降雨で、一部で被害が報告されている。現状の生育は肥大良好で、豊作型と予想している。8月までは少な目であるが、9月から本格的に増えてくると予想される。兵庫産は干ばつの時期に定植され、肥大期にようやく降雨があつて、平年並みの大きさに仕上がっている。7～8月は農家で貯蔵した物の販売になるが、早めに出荷して盆前には切り上がることも予想される。JAの冷蔵庫に貯蔵した物は年明けまで出荷されると予想される。



その他

ブロッコリーは、北海道産の現状は7～10日程度遅れて出荷が始まっているが、例年の半分程度である。7月中旬には通常の出荷ペースに戻り、7月25日の週には最大のピークを迎えると予想される。8月に入ると他の収穫物の作業が始まりやや減ってくると予想している。作付けの減少はあるが、8月は前年を上回る出

荷と予想される。

かぼちゃは、北海道産は例年と同様に9月の初めからと予想している。作付けは前年の95%と減っている。ピークは10月上旬に来てその後いったん減るが、12月には再び増えると予想される。現状は大雨の影響はない。品種は「くりゆたか」メインの出荷である。

とうもろこしは、北海道産（名寄）は7月末頃から始まり、ピークは8月10日前後、9月20日頃までとシーズンは長い。作付けは微増であり、品種は「ゴールドラッシュ」と「ほしつぶコーン」である。同産（芽室）は、8月10日前後から始まり、盆明け頃にピークを迎えると予想される。定植後は干ばつであったが、5月後半から降雨が続き、7月上旬後半に入りようやく天気が回復し、生育そのものは順調である。品種は前半が「ゴールドラッシュ」、後半は「サニーショコラ」である。

えだまめは、山形産の「だだちゃ豆」は平年と同様に7月下旬から始まると予想される。ピークは盆前後の8月中旬で、現状は生育順調である。作付けは稲作からの転作もあつて増えている。青森産は乾燥の後の降雨と高温で生育は遅れている。出荷は7月中旬から始まり、ピークは盆前を予想している。作付けは前年並みである。

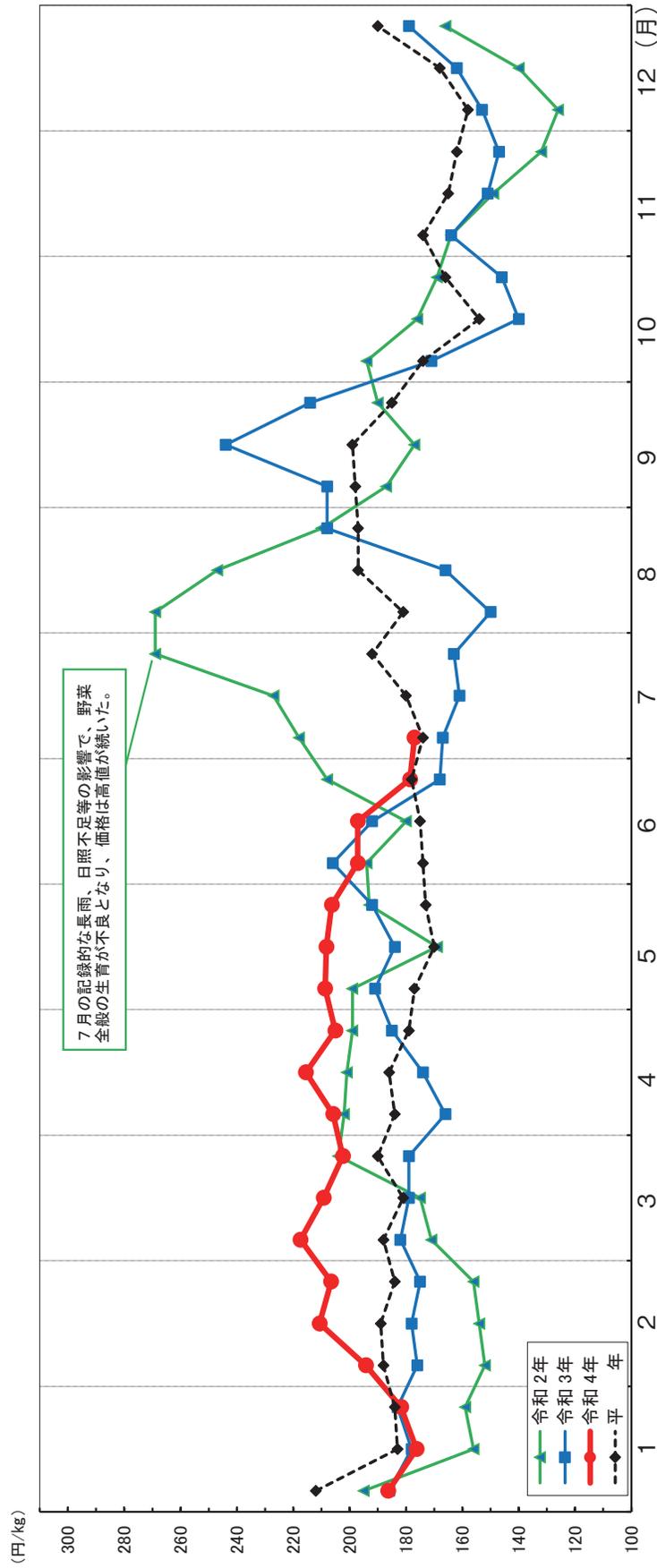
にんにくは、青森産の収穫作業は6月いっぱいまで8割程度終了したが、本年産は豊作傾向である。生果での販売は7月上旬頃にあつたが、市場出荷は9月に入ってから始まる計画である。

メロンは、北海道産（留萌）は「ルピアレッド」と「レノン」の赤肉メロンの出荷となり、ピークは7月中旬から盆前頃までと予想される。作付けは前年の91%と減っている。同産（共和）の「らいでんクラウンメロン」は7月中旬から始まり、ピークは盆明けからで、最終は10月までと予想される。「ルピアレッド」は7月から始まって盆明け頃までと予想される。「ティアラ」は7月25日から9月15日頃までと予想される。「SDR」は盆明けから始まり10月上旬までと予想される。メロン全体の作付けは微減である。

（執筆：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一）

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

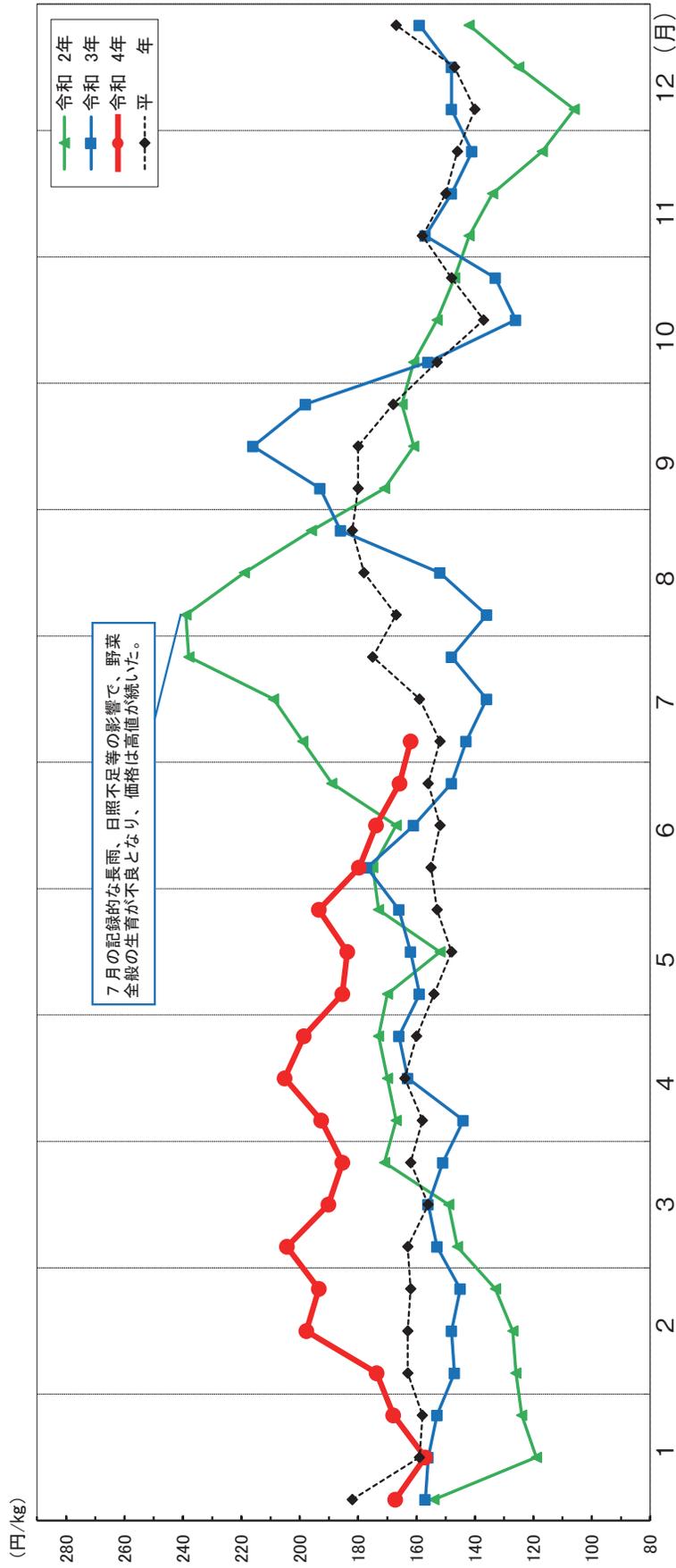
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬	下旬																																		
令和2年	195	156	159	152	154	156	171	175	204	202	201	199	199	169	193	194	180	208	218	227	269	269	247	210	187	177	190	194	176	169	164	149	132	126	140	166	
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179		
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177																		
平年	212	183	184	188	189	184	188	181	190	184	186	179	177	170	173	174	175	178	174	180	192	181	197	197	198	199	185	174	154	166	174	165	162	158	168	190	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成29年～令和3年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月															
	上旬	下旬																																				
令和2年	154	119	124	126	127	133	146	149	171	167	170	173	170	152	173	175	167	189	199	209	238	239	219	196	171	161	165	163	153	147	142	134	117	106	125	142		
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	159	162	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159		
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162																			
平 年	182	159	158	163	163	162	163	156	162	158	164	160	154	148	153	155	152	156	152	159	175	167	178	182	180	180	168	153	137	148	158	150	146	140	147	167		

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（平成29年～令和3年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。